名古屋女子大学　紀要　57（人・社）251～263　2011

紙芝居の描画技法の研究（第２報）

－教育紙芝居の名作に着目した描画技法の検討－

松田　ほなみ

Resarch of drawing technique of Kamishibai（Ⅱ）
－ Examination of drawing technique for paying attention to masterpiece of educational Kamishibai －

Honami Matsuda

１．研究の目的

紙芝居は、保育の現場で絵本とともに活用されている教材である。紙芝居は昭和のはじめ日本で生まれ、子ども達を魅了し児童文化として定着した。戦時中軍部に協力するなどマイナスのイメージもあるが、紙芝居を子ども達のためにと考え、制作していったものたちの並々ならぬ努力は、後世に引継がれ、現在も子ども達に夢をあたえ続ける。

絵本は、一人一人に読み聞かせをするのに向いているが、紙芝居は一度に大勢の子どもに演じることが出来る。

そこで本研究では、紙芝居および紙芝居に関する文献を調査し過去の名作といわれる紙芝居を選定する。その上で描画技法を検討し、紙芝居の魅力を絵から考察する。それらを通して、紙芝居の教材としての価値を再認識することを目的としている。昨年は､教育紙芝居の世界で、先駆者として活躍した川崎大治をとりあげたので、今回は、同じく先駆者としてたびたび文献に登場する高橋五山についての研究成果を報告する。

２．保育紙芝居の先駆者高橋五山

上笙一郎・山崎朋子著『日本の幼稚園』に「幼児紙芝居の開拓者　紙芝居作家・高橋五山」の章がある。記載されている高橋の経歴を要約すると以下のようになる。

高橋五山は、1889（明治21）年に生まれ、1965（昭和40）年に77歳で亡くなっている。五山は雅号で本名は、昇太郎といった。京都、東京と２つの美術大学を卒業しており、紙芝居の絵も描いている。

五山の父の仕事は、輸出用の刺繍をつくることであり、それは壁掛けのような美術品であった。将来は父の刺繍の下絵を描くということで、京都美術学校の図案化に入学した。しかし卒業後上京し、再度東京美術学校の図案化に入学する。大正元年に幼児向けの絵雑誌『幼女エバナシ』の編集に携わり、絵やストーリィを描き、幼児雑誌の世界に入っていく。昭和６年全甲社という出版社を興し、幼児を対象とした絵本と絵雑誌を主に出版する。おりしも街頭では、紙芝居屋が増え、黄金バットが子ども達を魅了していた。爆発的に人気を博するも、教育者や親のなかでは、紙芝居を俗悪文化とみなして、子どもに見ることを禁止するものも多くなっていた。そのような風潮に逆流するように、五山は紙芝居を作り始める。

『日本の幼稚園』に書かれている文をそのまま引用する。「街頭紙芝居は、その内容の芸術的

な価値という段になると、けっして、手ばなしでよろこべるものではありませんでした。なかには、加太こうじとか松井光義とかいった社会主義者もいましたが、紙芝居創作者の多くはルンペン・プロレタリアであり、その反映として、作品には、封建的な思想やアナーキーな雰囲気がただよっていたからです。加うるにまた、ほかの業者との競争の必要から、その描かれる絵は、しばしば刺激のつよいグロテスクなものになりがちだということもあったからです。

街頭紙芝居のこうした傾向にたいして、教育的にすぐれた紙芝居を作ろうとする運動と、もっと芸術的に高い紙芝居をつくろうとするこころみとが、昭和10年ごろになってはじまってきます。」[1)]

このような情勢の中、五山は紙芝居が持つ、子ども達を惹きつける魅力に着目し、芸術的紙芝居の創作に生涯をかけることになるのであるが、自ら起こした会社によって、多くの人々をも育てたと筆者は考える。五山が脚本をつくり、画家たちに描かせた作品が多く存在する。初期に育てた、青年画家日向まことには、アメリカから買ったディズニーの絵本を貸し与え、「線描を太く、色彩は淡く」[2)]と指示を出した。そしてこの指示の意味については、次のように述べている。「線描を太くといったのは、うしろのほうの子供にもよく見えるようにと考えたからであり、色彩を淡くと頼んだのは、街頭のように直射日光にさらされぬ幼稚園の保育室では、淡い色彩のほうが調和すると思ったからでした。」

そのころの街頭紙芝居は、毒々しい色彩のものが多かったということであるが、それとは対照的な意見であると言える。しかし街頭紙芝居の色彩は、日光にさらされるからではなく、強い刺激を追い求めた結果であろうと思われる。保育室の置かれた条件とともに、幼児にマッチしたものとして五山は、淡い色彩を選んだと筆者は考える。淡い色彩になれば、遠目では背景と登場するものの識別がしにくくなる。そのため輪郭を太くする必要性が生じたと思われる。紙芝居を描くとき輪郭を描くのがあたりまえのように思っている人が多いが、五山の支持が紙芝居の描き方として、定着していったのではないかと考える。

その後五山は、今までになかった貼り絵紙芝居を制作する。その貼り絵紙芝居によって、五山の目指した芸術性に到達することが出来た。五山が試した張り絵紙芝居は、瀬名恵子に受け継がれ、愛らしい絵本や、紙芝居が生み出されている。そして街頭紙芝居が手描きの１点ものであったのに対し、印刷紙芝居を制作したことにより、全国に普及して行った。
以下高橋五山の簡単な略歴を記す。（＜表－１＞参照）

＜表－１＞五山略歴

1889（明治21）年１月29日	京都市上京区油小路通下立売上ル近衛町166番地 父吉次郎、母いと（旧姓嶋本）の長男として生まれる。
1931（昭和６）年	「全甲社」創立、絵本、絵雑誌発行
1935（昭和10）年４月	第Ⅰ期幼稚園紙芝居第一作『赤ヅキンチャン』発売
1938（昭和13）年５月	第Ⅱ期幼稚園紙芝居『ピーター兎』発売
1938（昭和18）年９月	『ガンバレ　コスズメ』（軍人援護紙芝居競演会一等入選作）出版
1950（昭和25）年11月	「教育紙芝居研究会」設立　常任委員になる。
1951（昭和26）年１月	「日本紙芝居幻燈（株）」社長になる。
1951（昭和26）年６月	『こねこのくろちゃん』出版
1959（昭和34）年11月	紙芝居作家協会報「せいくらべ」に自伝的短文「ででむし」寄稿。
1965（昭和40）年７月15日	没。77歳

1965（昭和40）年	上笙一郎・山崎朋子『日本の幼稚園』（理論社）に「幼児紙芝居」の開拓者として掲載される。

（出典：『紙芝居文化史』（萌文書林　2008年）

この略歴は、紙芝居文化史に記載されている高橋五山のものを拾い上げた。経歴だけ見ると順調に見えるが、製作された紙芝居はなかなか売れず、教育紙芝居の普及には時間と労力を要し、生涯をかけての仕事となった。その成果が認められ、五山賞が設立され、上笙一郎・山崎朋子『日本の幼稚園』に「幼児紙芝居」の開拓者として評価されるに至った。

３.五山紙芝居

高橋五山が設立した全甲社で、最初に出版された紙芝居のリストは以下の如くである。

第Ⅰ期幼稚園紙芝居1935（昭和10）年４月

「全甲社」幼稚園紙芝居シリーズ第Ⅰ期10巻

＜表－２＞「全甲社」幼稚園紙芝居シリーズ第Ⅰ期10巻

	タイトル	脚本	画	発行日
1	赤ヅキンチャン	大村　主計	日向マコト	1935（昭和10）年４月15日
2	花咲ぢぢい	高橋　五山	日向マコト	1935（昭和10）年５月28日
3	長靴をはいた猫	大村　主計	蛭田　三郎	1935（昭和10）年６月28日
4	金のさかな	大村　主計	日向マコト	1935（昭和10）年７月23日
5	大国主命と白兎	高橋　五山	高橋　五山	1936（昭和11）年５月23日
6	トンマのトン熊	高橋　五山	高橋　五山	1936（昭和11）年２月20日
7	三匹の仔豚	高橋　五山	高橋　五山	1936（昭和11）年１月30日
8	かぐや姫	高橋　五山	千地　　弘	1936（昭和11）年８月31日
9	アリス物語前編	高橋　五山	日向マコト	1937（昭和12）年10月20日
10	かもとり権兵衛	高橋　五山	中川　解三	1937（昭和12）年10月20日

（出典：『紙芝居文化史』（萌文書林　2008年）

第Ⅰ期幼稚園紙芝居は、第１巻『赤ヅキンチャン』（1,000部出版）を皮切りに自社の「全甲社」から刊行が開始され、このとき五山は47歳になっていた。『紙芝居文化史』には、シリーズ１期10巻となっているが、上地ちづ子著『紙芝居の歴史』には、第Ⅰ期12巻と掲載されている。『日本の幼稚園』には、「まず第一期刊行として十の目録をつくり、これに＜幼稚園紙芝居

＞というタイトルをつけた」[3]とある。10のタイトルは、ほぼ『紙芝居文化史』の10のタイトルと一致する。違いは、９アリス物語前編が『日本の幼稚園』では、ふしぎの国（アリス物語）となり、『紙芝居文化史』がカタカナや漢字が多く用いられているのに対し、赤づきんちゃん等ひらがなが、多く使われている点である。

『紙芝居の歴史』には、高橋は幼児を対象とした「幼稚園紙芝居」を1935（昭和10）年から刊行した。又、『赤づきんちゃん』『金のさかな』『大国主命と白兎』といった作品が並ぶ第Ⅰ期12巻は、世界名作、内外の民話や伝説などを素材にして、各巻とも16～20場面、５色刷りであったと書かれている。[4]

なおここでは、『金のさかな』の脚本は、五山であるが『紙芝居文化史』では、脚本は大村主計になっている。筆者が調べたところでは、『金のさかな』の脚本は、五山という記述が正しいのではと考えることができる。

次に画風について言及する。五山によって作られた紙芝居の画風であるが、『紙芝居の歴史』には、以下のように書かれている。

「高橋は、京都市立美術工芸学校および東京美術学校の図案科を卒業していましたので、紙芝居制作にあたって、脚本とともに、絵画を手がけることも少なくありませんでした。その絵は日本画風で、ていねいに巧に描かれています。しかし、絵雑誌の絵話と同様に、各画面は均一的な構成で、街頭紙芝居の特質であった画面変化は、ほとんど見ることができません。」[5]

第Ⅰ期の作品の中で五山が脚本も絵も描いたと思われるものは、『大国主命と白兎』、『トンマのトン熊』、『三匹の仔豚』である。『大国主命と白兎』の絵が『日本の幼稚園』に掲載されているので以下その絵を分析してみる。まず印刷が白黒なので色が分からないが、グレーの明度から推察すると、淡い色合いだと思われる。色彩については「たいていの絵本は、三原色と

図１　『大主命と白兎』脚本・画　高橋五山　1936（昭和11）年５月23日[8]

墨で刷るのがふつうでしたが、こんどは、うす赤を一色加えて、五度刷りとしました。」[6)] とある。ここでは、うす赤とされているが、『紙芝居文化史』には「色彩は淡いものとし、赤なども中赤程度で無用な刺激を避ける工夫がなされた。」[7)] とあり、推測するに、真っ赤の部分は紙芝居の中になかったということであろう。そして、登場するものに濃い輪郭線がきちんと描かれており、日向まことに忠告したことを自ら実践していることがわかる。イラスト風の愛らしい兎やさめ、品のよい大国主命や人々、達筆な風景画にみられるように、全体が上品な雰囲気をかもし出している。情景を細かく描写した具象絵画である。

「全甲社」幼稚園紙芝居シリーズ第Ⅱ期10巻

1938（昭和13）年５月から出版された第Ⅱ期幼稚園紙芝居を調査した結果は、以下の如くである。

『紙芝居の歴史』には、「1938（昭和13）年から『ピーター兎』など第２期12巻の刊行をはじめたが、全巻の完結は、確認できない」[9)] と書かれている。『日本の幼稚園』には、「昭和一三年から第二期十の刊行に着手した」[10)] とあり、『はなさかじじい』では、淡い地色の上に黒一色を浮き出させた影絵式技法をこころみ、『○と□と△さん』などでは張り絵や折り紙での制作をためすなど、冒険をあえてしてみたと書かれている。『紙芝居文化史』には、「高橋五山の「全甲社」、第Ⅱ期幼稚園紙芝居として『ピーター兎』（脚本/高橋五山、画/蛭田三郎）を皮切りに、10巻の刊行開始（表記は、11集）」とある。[11)]

結局以下の３冊しか確認することが出来なかった。

1938（昭和13）年『ピーター兎』脚本高橋五山、画　蛭田三郎、
1938（昭和13）年『はなさかじじい』脚本、画　高橋五山
『○と□と△さん』脚本、画　高橋五山

戦後の1949（24）年出版された紙芝居に『○と□と△ちゃん』高橋五山作のものがある。最初は第Ⅱ期幼稚園紙芝居『○と□と△さん』と同じものかと思っていたが、△さんが△ちゃんになっているので、違うものだとわかった。内容は同じであると推測できる。

『○と□と△ちゃん』の作品は『紙芝居－創造と教育性』[12)] の中で見ることができた。

これは丸と三角と四角がすもうごっこをする作品である。途中「長四角ちゃん」が加わる。あるとき、原っぱでというお話からはじまり、「どひょう」にするためにぐるっと大きな「わ」を描くのであるが、画面にさんかくが、「わ」を描いているのが表紙で、２枚目からは、土俵をあらわす線と相撲を取る２人と行司をする１人、それぞれ、まるやさんかく、しかくの色紙に手と足を描き、顔を描いたものである。手や足、顔は、線だけの大変シンプルなものである。背景は殆ど描かれていない。色が付いていたと思われるが、白黒の画像なので残念ながら色はわからない。『大国主命と白兎』の具象画風に比べると驚くような変わりようである。『日本の幼稚園』に記載されている、1938（昭和13年）に出版された『○と□と△さん』と同じであるならば、「貼り絵や折り紙での制作をためした。」[13)] とあるので、この構図が貼り絵紙芝居の第一号になるのではないかと考えることができる。

○と□と△で構成することについて思い浮かべるのは、セザンヌの「自然を円筒、球、円錐として処理する」という言葉である。円筒を横から見れば、長方形や正方形の□であり、真上から見れば○、底面は○、球はどこから見ても○、円錐は横から見れば△、真上からまたは底

面は○、すなわち、○と□と△である。今でこそ、○△□という言葉は、造形に関する書物でよく目にする言葉であるが、当時においては大変新しい言葉だったのではないだろうか。

五山は、1909（明治42）年東京美術大学を卒業しているので、学生時代にいち早くセザンヌのことを知ったか、1938年の出版までに知ることが出来、最新の芸術理論を紙芝居に取り入れたのではないかと考えられる。参考までにこの貼り絵技法について『紙芝居の歴史』では「貼り絵紙芝居は、物資が極端に乏しくなった戦時下にあって、ありあわせの紙を使い、保育現場で簡単に作れる手作り紙芝居の普及をはかろうとしたものでした。一部分は雑誌紙芝居等に紹介されましたが、ほとんどは戦後になって知られる作品です。」[14] と書かれている。『○と□と△さん』が作られたと思われる1938（昭和13）年は、国家総動員法が交付された年にあたり、昭和16年12月には太平洋戦争に突入していく。当然絵の具等の画材は思うように手に入らなかっただろう。物資の乏しさを解消する為に考案したということも納得できる。しかし、その構図には、芸術性を追及した人物だからこそ、最新の芸術を取り入れ、新しい技法を試し、まったく新しい紙芝居をつくることが出来たのだと筆者は考える。

『紙芝居　創造と教育性』には、『○と□と△ちゃん』をつかった保育園での実践記録も掲載されている。それによれば、どんなにか園児たちに受け容れられ、園児達を楽しませていたかがわかる。

「全甲社」幼稚園紙芝居シリーズ第Ⅰ期10巻以外に出版された紙芝居

この時期に出版された作品は、以下の５点である。

①『ぶんぶくちゃがま』高橋五山作レコード紙芝居1936（昭和11）年

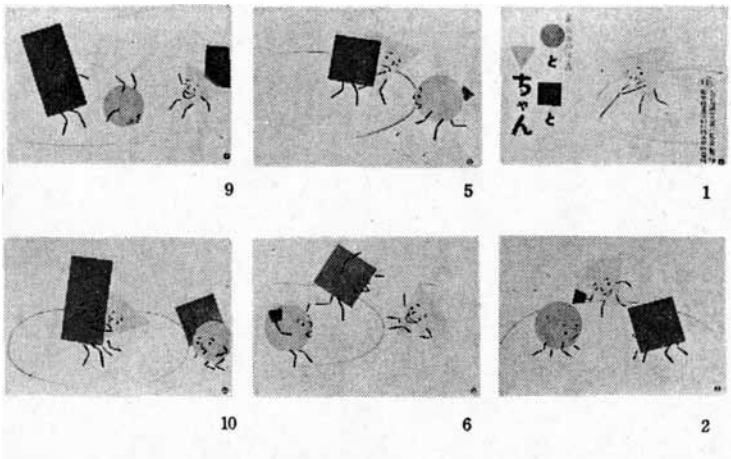
②『たま（魂）まつり』仏教紙芝居1936（昭和11）年

③『お盆の話』仏教紙芝居1936（昭和11）年

④『お釈迦様と鳩』仏教紙芝居1936（昭和11）年

⑤『親鸞上人伝上下巻』大谷派本願寺依頼により「全甲社」で制作、出版1936（昭和11）年宗内日曜学校で無料配布

仏教紙芝居は、仏教幼稚園を経営し、口演童話家でもあった内山憲尚の依頼であった。



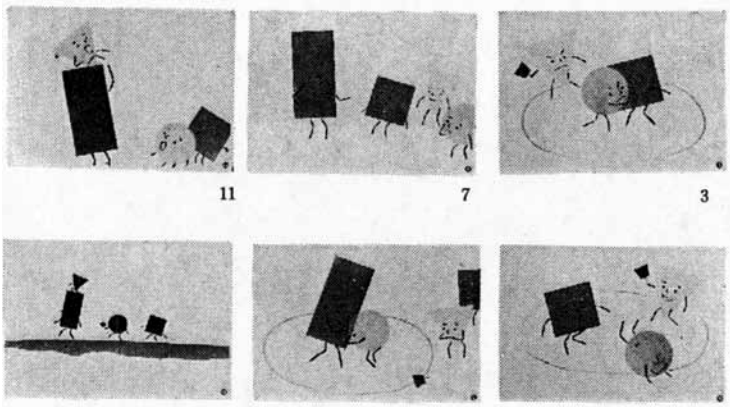


図２　『○と□と▽ちゃん』[15)]

戦時中の五山紙芝居

『メディアとしての紙芝居』に掲載されているものの中で、編集者は高橋五山、発行所は全甲社のものを総て抜粋した。題名の次は内容であり、作家（脚本）、画家の順に掲載されている。[16)]

＜表－３＞戦時中の五山紙芝居

年　号	作　品　名	作　家	画　家
1937（昭和12）	拳骨軍曹 （日本兵の活躍）	高橋　五山	日向まこと
1938（13）	ピーター兎（童話） からす勘兵衛（童話） 子供召集令（銃後のこども）	高橋　五山 高橋　五山 平野　　直	蛭田　三郎 中川　治男 中川ハルオ
1939（14）	愛馬の出征（兵士と軍馬の絆） 七匹の小山羊（童話） 爆撃荒鷲隊（海軍航空隊の活躍） ☆オムスビコロリン	平野　　直 高橋　五山 平野　　直 高橋　五山	丘　みどり 高橋　五山 丘　みどり 高橋　五山
1940（15）	元寇（国威発揚） ハンスの宝（童話） アカンボバアサン（日本昔話） 良寛さん（日本昔話） 建国物語　神武天皇さま（日本神話） ☆日蓮上人（前編）を全甲社で販売。 ☆軍用犬のてがら ☆『成道のお話』	平野　直 高橋五山 高橋五山 内山憲尚 高橋五山	牧ヒトシ 蛭田三郎 中川ハルオ 丘みどり 牧ヒトシ
1941（16）	クマノオウチ（童話） 翼賛一家　三ちゃんの巻（いたずら笑い話） うっかりさん（国策実行） 喋るな聞くな（スパイ防止） ☆『靖国の父』 （「大政翼賛会」宣伝部懸賞当選）	高橋五山 高橋五山 高橋五山 高橋五山 五山脚色	中川ハルオ 中川ハルオ 中川治男 中川治男 丘みどり画
1942（17）	『駐在日記』村の駐在さんの奮戦記	平野　直	由利聖吉

1943（18）	ウラシマ太郎（日本昔話） 鬼ノツリハシ（童話） ネズミのヨメイリ（童話） ガンバレコスズメ（国策宣伝童話） ☆おとなりさん（教育紙芝居研究会編集）	高橋五山 高橋五山 高橋五山 高橋五山 高橋五山	丘みどり 中川ハルオ 中川ハルオ 高橋五山 赤松俊子
1944（19）	金太郎の落下傘部隊（戦意高揚昔話） ☆ウチテシヤマム（決戦幼児文化紙芝居）切抜き貼り絵 ☆奴のつかい	高橋五山	青木末男

（出典：鈴木常勝『メディアとしての紙芝居』久山社　2005年）
☆印は、調べて加えたもの

戦時中（1937～45年）に、高橋五山が脚本・絵も手がけたものは、1939（昭和14）年『七匹の小山羊』童話、1943（昭和18）年『ガンバレコスズメ』国策宣伝童話の２作になる。『ガンバレコスズメ』は、軍事保護院・軍事援護会・日本少国民文化協会選定軍事援護紙芝居競演会一等入選作品となっている。『メディアとしての紙芝居』には、筆者が現存を確認した作品のみを挙げたという注意書きがある。[17)]

それ以外に『紙芝居文化史』に、1940（昭和15）年、建国物語神武天皇さま（日本神話）の記載があり、３作を確認することができた。

『日本の幼稚園』では、戦中の五山について、「東京日々新聞社（現在の毎日新聞社）からの国策紙芝居株式会社設立の依頼をきっぱりことわり､幼児の生活をあつかった『オベントウ』、貼り絵・折り紙で作った幼児紙芝居『コトリノユメ』『コブタノケンカ』、『日本昔話をもとにした『かみなり』などといった作品をこつこつと制作していった」[18)] と記述している。『コブタノケンカ』は、1971（昭和46）年ひよこシリーズ（作高橋五山・赤坂三好画）として出版されている。

『紙芝居の歴史』には、五山は、戦中期までに37巻の紙芝居を出版したことになっていると書かれているが、大半は目録のみで未確認ということである。[19)]

戦時中の紙芝居における全甲社出版数の割合は、『メディアとしての紙芝居』より拾い上げると以下のようになる。

＜表－４＞戦時中の紙芝居における全甲社出版数の割合

1937（昭和12）年	１冊	内全甲社出版紙芝居１冊
1938（昭和13）年	５冊	内全甲社出版紙芝居３冊
1939（昭和14）年	５冊	内全甲社出版紙芝居３冊
1940（昭和15）年	８冊	内全甲社出版紙芝居５冊
1941（昭和16）年	37冊	内全甲社出版紙芝居４冊
1942（昭和17）年	24冊	内全甲社出版紙芝居１冊
1943（昭和18）年	44冊	内全甲社出版紙芝居４冊
1944（昭和19）年	18冊	内全甲社出版紙芝居１冊
1945（昭和20）年	１冊	内全甲社出版紙芝居０冊

（出典：鈴木常勝『メディアとしての紙芝居』久山社　2005年）
（☆の数は、入れていない）

左が戦時中に出版された紙芝居の数で右が全甲社出版の数である。戦中後半全国の紙芝居の出版数は飛躍的に増えているが､全甲社出版数は増えていない。このことからも戦争に対する、五山の考え方が推測できるだろう。

戦後の五山紙芝居

＜表－5＞

年　　号	題　　名	画　家
1948（昭和23）年	てんからおだんご	高橋　五山
1949（昭和24）年	○と□と△ちゃん（1965年） けんかだま（1983年、1984年） ぶたのいつつご（1968年、1986年、1999年（第12刷） 全甲社→ほるぷ出版	高橋　五山 高橋　五山 高橋　五山
1950（昭和25）年	こねこのちろちゃん （紙芝居コンクールに手文部大臣賞を受賞）	高橋　五山
1951（昭和26）年	こねこのくろちゃん	高橋　五山
1952（昭和27）年	たわらのねずみがこめくってちゅう よわむしちゃんこう ふしぎのくにのアリスちゃん おやつ　日本紙芝居幻灯	西原ひろし 小谷野半二 油野　誠一 青木　末男
1953（昭和28）年	おとなりさん	赤松　俊子
1955（昭和30）年	ほらふきやまぶし（紙上紙芝居）	伊久留朱明
1959（昭和34）年	ひとりでできるね ひゃくまんびきのねこ（ガグ原作）	田代かんや 川本　哲夫
1960（昭和35）年	まいごのポスト　童心社 キンショキショキ（豊島興志雄原作）	センバ太郎 西原比呂志
1965（昭和40）年	○と□と△ちゃん	瀬名恵子(はりえ)
1968（昭和43）年	ぶたのいつつご	高橋　五山
1971（昭和46）年	こぶたのけんか　―ひよこシリーズ作（2005年、2007年28刷発行）	赤坂　三好
1973（昭和48）年	おべんとう（　987年　童心社）	林　　俊夫
1976（昭和51）年	ぶたのいつつご（童心社） のみのかわでつくった王さまのながぐつ(イタリア民話)（1986、2002、童心社） てんからおだんご（原作・堀尾青史脚本）	瀬名恵子(はりえ) 岩崎ちひろ 金沢　佑光
1979（昭和54）年	ちびちゃん　―紙芝居傑作選／高橋五山集（童心社）	瀬名　恵子
1984（昭和59）年	けんかだま　―黄金期名作選	高橋　五山
1987（昭和62）年	したきりすずめ（童心社）	林　　俊夫
1997（平成９）年	おむすびころりん（童心社）	鈴木　寿雄
2000（平成12）年	てんからおだんご（原作・堀尾青史脚本）	川本　哲夫
2003（平成15）年	エメリヤンとたいこ（トルストイ原作　童心社）	小谷野半二

以上のものは、柳城大学図書館が所蔵しているリストや、紙芝居文化史等の書籍を調査したものである。系統立てたものがなかったので労力を要した。

『紙芝居創造と教育』[20] に、作家堀尾青史と稲庭桂子が、五山の作品について対談した文が掲載されている。それによると堀尾は五山を俳諧的と評し、稲庭は単純素朴な独特の世界であると評している。またその対談のなかで、『てんからおだんご』が行方不明になっているという話も出ている。

1976（昭和51）年９月１日発行の『てんからおだんご』（原作）高橋五山、（脚本）堀尾青史、（画）金沢佑光があり、その裏に「1948（昭和23）年　高橋五山が『てんからおだんご』をつくった」という堀尾青史の記載がある。従って現在使用されている作品は堀尾が行方不明になっている作品を思い返して金沢に作らせたものではないかと推測している。その後、2000（平成12）年『てんからおだんご』（原作・堀尾青史脚本・川本哲夫画）も出版されており、現在でも『てんからおだんご』は購入することが出来るようになっている。

おはなしが、＜はるの巻＞と、＜あきの巻＞の２種類書かれており、「春は原作どおり、秋は脚色してある」と書かれている。

筆者は、多くの紙芝居のなかから『てんからおだんご』をみつけたとき、不思議な気持ちがした。あまりにも他の紙芝居と違うのである。他の多くの紙芝居が具象であるのに、この作品は抽象画なのである。おばあさんの顔は、丸い紙に目を表す点がつけられている、または短い線が付けられているのみ、すべて横顔なので、目は一つしかない。髪を表す線は一本付けられている。体は円を中心で四等分した、櫛形を半分にした形。ござを表す四角形、丸い太陽、たなびく細い雲。その中から、なぜか串が伸びてきて、団子がくるくると降りてくる…。本当にシンプル極まりない構図なのだが、張ってある色紙がおそらく和紙で出来ていて、和紙特有の毛羽立ちが画面の空気を動かしているようである。和紙なのでこのような色調になるのかも知れないが、彩度を抑えた中間色をうまく組み合わせており、原色は殆ど使っていない。この構図・色・動きは、多くの絵画を研究し、抽象絵画も知っている人でないとできないといえる。まことに詩情豊かな美しい絵である。筆者は、この絵が五山の代表作のひとつであると考える。

紙芝居裏面に、堀尾青史がこう書いている。「この作品は、遠いはるかな夢を見るような、ほのかな、やさしい、あたたかい愛情がしっとりとながれていて、なんともいえぬしみじみとしたふんいきをもっています。これこそ高橋五山独特の世界です。しずかに、ゆっくりと子どもたちに見せてください。心のおく底へ銀のしずくのように流れおちてゆくことでしょう。」

この紙芝居に関連があると思われるが、『おばあさんとぼたもち』という作品があることを教育紙芝居研究会会報「紙芝居」第一回紙「与える紙芝居と創造性・自発性　高橋五山　1956年８月25日」で発見することが出来た。五山が自ら書いたと思われる記事である。これが『てんからおだんご』のもとになったのではないかと推測する。

折紙や貼り絵の紙芝居は、現在では瀬名恵子が貼り絵で絵本や紙芝居を制作し、『ねないこだれだ』などとても愛らしい作品をたくさん世に送り出している。1976（昭和51）年『 ぶたのいつつご』や、1965（昭和40）年『○と□と△ちゃん』が瀬名の画で再制作された。

『ぶたのいつつご』は色紙を貼り付けた作品で、『○と□と△ちゃん』以上にシンプルな作品である。同じ形に切られた色紙のピンクの豚がきれいに並んでいる。一匹づつクローズアップし、しっぽの違いを当てるように問う、参加型紙芝居の登場である。たいへんシンプルな幼児向けの紙芝居であり、幸いなことに、学生に演じさせ鑑賞させる時間を持つことが出来た。見ている全員が驚くほど夢中になり、紙芝居に集中し、楽しさを共有することができた。『ぶた

のいつつご』の裏には、次の五山の解説がついていて、「この紙芝居は、「あてもの遊び」の興味をかりて、幼児の注意の集中力、また、確かな記憶力を養うのに役立てようとするものです。」[21] 解説の他にぶたの作り方まで描かれている。

『てんからおだんご』『ぶたのいつつご』両方を学生に演じさせたが、『ぶたのいつつご』のほうがより盛り上がったように感じた。紙芝居を演じる順番や、準備（演じ方）にも関連したのかもしれない。

五山の紙芝居論

五山の紙芝居について考えを明らかにするために、五山自身が書いた文をいくつか調べてみた。ひとつは教育紙芝居研究会会報「紙芝居」に掲載されたもの、もうひとつは1959（昭和34）年11月に紙芝居作家協会報「せいくらべ」に掲載された、自伝的短文「ででむし」である。「ででむし」は、『日本の幼稚園』に紹介されている。

教育紙芝居研究会会報「紙芝居」とは、教育紙芝居研究会が1950（昭和25）年11月に設立され、機関誌「紙芝居研究」を発行したもので、「紙芝居研究」は、その後「会報紙芝居」と名を変えた。この教育紙芝居研究会の常任委員に、五山は就いている。委員長は佐木秋夫とあり、事務局長は稲庭桂子であった。教育紙芝居研究会は紙芝居幻燈（株）を併設し、紙芝居の出版事業を開始した。その紙芝居幻燈（株）の社長が五山であった。その後「1956（昭和31）年５月日本紙芝居幻燈（株）、資金繰りに困難を極め、発足以来63本の紙芝居作品を制作して、事実上営業休眠状態に。11月倒産」[22]

機関誌「紙芝居」は、1956（昭和31）年７月創刊、編集人は稲庭恵子であった。８月に第２号が出され次々と出版されたが、翌年1957（昭和32）年１月に６号を発行後、休刊状態が続いた。10月に加古里子が編集人になり、７号を発行し、以後加古により1959（昭和34）年６月まで発行される。[23]

「会報紙芝居」第二回紙に「与える紙芝居と創造性・自発性　高橋五山」と題されたＡ３の用紙１枚半をつかった文がある。その末尾には、1956年８月25日と記されている。第一回紙には、「絵にならない紙芝居脚本」があり、「絵にならない紙芝居脚本（つづき）」と題する文もあったが、これは第三回ではないだろうか。

なお柳城大学図書館蔵「会報紙芝居」は、手書きでガリ版刷りであった。[24]

「与える紙芝居と創造性・自発性」については、研究大会のテーマ“子どもの創造性と自発を伸ばす紙芝居教育”に異を唱える書き出しで、「自分の紙芝居は、与えるもので、創造性とか自発性引き出して、育てたり、伸ばすことは、美術教育や作文の会の仕事だと考えている」というものであった。研究大会については「1956（昭和31）年８月19日、「教育紙芝居研究会」主催「第１回紙芝居教育研究会」が東京の教育会館第２集会室にて開催され、学校教育のなかでの紙芝居の活用の仕方や子供の創造性について討議」[25]という文があり、そこで討議されたテーマに対して、与える紙芝居をかくことが子どもの自発性や創造力を伸ばすことになるという五山の考えを述べたものであろう。

「紙芝居」1957年10月号には、事務所が紙芝居会館より、会員の高橋五山宅になったという連絡が掲載され、自宅を事務所にして会報を出し続けていったことがわかる。このときの編集人は加古里子だった。

「ででむし」には、紙芝居の芸術化を目指した五山の心情がつづられていることをみることができる。

４．まとめ

五山は、紙芝居の芸術性を高めることをめざして奮闘したわけだが、その努力は、『てんからおだんご』や、『ぶたのいつつご』など素晴らしい作品の数々を生み出し、世に送り出し、また後進も育てるといった成果を生み出し、充分に実を結んだといえる。また貼り絵紙芝居は、誰もが作ることが出来るように考案されたということであるが、その単純化された形が抽象絵画を彷彿とさせる。抽象絵画は、頭の中で創造力を膨らませる。レオ・レオーニの作った絵本『あおくんときいろちゃん』26）は、ちぎったまるだけなのに、あたかも生命を宿したもののように飛び跳ねる。『大国主命と白兎』は、具象画風で1938（昭和13）年『○と△と□さん』において、変貌を遂げた。その後の『ぶたのいつつご』『てんからおだんご』と制作されるにあたり、さらに抽象性を深めていったように思う。まるで抽象画家の変遷を見ているようである。筆者は、今回の研究を通して、このような素晴らしい紙芝居に出会えたことを感謝している。紙芝居制作は、絵を描くことに慣れていなければ、とても難しいと感じている。筆者も長年絵を描いてきたが、一枚の絵より難しいと実は内心考えていた。しかしこのシンプルな紙芝居を見たことにより、あたらしい展望が開けたと思った。今後この経験を生かして学生指導や、教材制作に取り組みたいと考えている。

末尾になったが、五山の業績を顕彰して、その年に出版された全紙芝居のなかから優秀作に与えられる、五山賞が1962年に設けられ現在も続いている。受賞作は『池にうかんだびわ』をはじめ紙芝居の傑作が並んでいる。

最後に、審査者に深謝いたします。

図３　『ぶたのいつつご』表紙

図４　『てんからおだんご』表紙

引用・参考文献

１）上笙一郎・山崎朋子『日本の幼稚園』理論社、1965年発行p158
２）上笙・山崎前掲、p162
３）上笙・山崎前掲、p161
４）上地ちづ子『紙芝居の歴史』久山社、1997年発行p51
５）上地前掲、p53
６）上笙・山崎前掲、p163
７）石山幸弘『紙芝居文化史』萌文書林、2008年発行p63
８）上笙・山崎前掲、p162
９）上地前掲、p53

10）上笙・山崎前掲、p166
11）石山前掲、p76
12）堀尾青史・稲庭桂子編『紙芝居－創造と教育性』童心社、1972年発行、p42
13）上笙・山崎前掲、p166
14）上地前掲、p53－p54
15）堀尾・稲庭前掲、p42
16）鈴木常勝『メディアとしての紙芝居』久山社、2005年発行、p103－p113
17）鈴木前掲、p103
18）上笙・山崎前掲、p168
19）上地前掲、p54
20）堀尾・稲庭前掲、p203
21）高橋五山『ぶたのいつつご』童心社、1968年発行
22）石山前掲、p156
23）石山前掲、p161
24）教育紙芝居研究会『紙芝居』1956年発行、（名古屋柳城大学所蔵）
25）石山前掲、p156
26）レオ・レオーニ『あおくんときいろちゃん』至光社、1967年発行
27）高橋前掲、①
28）高橋五山原作『てんからおだんご』童心社、1976年発行